

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

初冬の黒姫山

大町岳陽高校の11月最後の山行は黒姫山日帰り山行。来年度の県大会の下見を兼ねた。県大会の下見は毎年この時期行っているが、思いがけず今年一番の寒気に遭遇し、雪山登山となった。ここ数日の天気予報から予測はできていたものの、前日の天気予報を見て、コーチの松田氏と相談、部長のAを通じて生徒たちやその保護者の様子も聞いた上で、決行することにした。今回は男子9名、女子4名、顧問3名にコーチ1名の豪華布陣。マイクロバスで7時15分に出発。学校から登山口までの道も北向き斜面はうっすら雪で白くなっている。

8時50分登山口に到着。最初から雪上歩きになるため、スパッツを装着。まだ冬の寒さに馴れていない故か、実際の温度以上に寒く感ずる。

県大会のコースは、「戸隠キャンプ場(1195m)→大橋より分岐→古池(1915m)→新道分岐→黒姫山(2053m)→黒姫スキー場上部分岐(1870m)→七ッ池・大池→大ダルミ→大橋分岐→戸隠キャンプ場(1195m)」と発表されている。8年前と同じコースである。県大会に向けて、今回の山行は、おおざっぱにどんな山なのかをつかむのが目的。葉の落ちた山は見通しがきいて、地形がよくわかる。全体を3班に分けて、適宜先頭を交代させながら進んでいく。最初は「寒い」と言っていた生徒たちもしばらく歩くと温かくなってきたと、一枚脱いだ。

古池から新道分岐までの区間、登山道は、地図上の道とはだいぶズレている。生徒には地図と地形をよく見ることを教える。我が校の生徒たちは、雪が出てくると大はしゃぎ。先へ先へと進んでいく。今回は特に女子が元気がいい。心配された雪もそれほどではなく、稜線に出ても風もなく穏やかであった。

12時55分に山頂に到着。生憎眺望は利かなかったが、思ったより条件のよかった山頂で山岳部歌を歌う。日照時間の少ない11月下旬、大橋には遅くも16時には着きたい。雪の状態も鑑みると、七ッ池から大ダルミを回っている余裕はなさそうだ。残念だが、今日は来た道を新道分岐までトラックバックしようということにした。雪の状態がいいので、下りも快適。14時40分には新道分岐に到着。大橋に到着したのは、15時45分。

この時期にしては、予想以上の積雪で、県大会の下見としては残念な思いが残ったが、生徒たちには雪上歩行のよい訓練になった。これからはじまる本格的な雪の時期に向けてのモチベーションをあげるには、最高の山行であった。



関東高体連登山大会兼安全登山研修

11月10日～12日に千葉県で高体連の関東大会が開かれたが、その大会に招かれて雪崩事故についての話をさせていただいた。

今年の関東大会は廻り順では栃木県が担当県であったが、雪崩事故の関係で返上せざるを得ず、千葉での代替開催であった。今年になって急きょ決まったということ、加えて安全が約束されることがいつにも増して要求される中、千葉県の樽委員長をはじめとする皆さんのご尽力は並大抵のものではなかったと推察する。大会は「第61回関東高等学校登山大会兼関東高等学校安全登山研修」という名称で行われ、競技のほかに大会初日に小生の「那須雪崩事故検証委員の提言——安全登山への願い」という講演があり、最終日には、那須雪崩事故検証委員の北村憲彦さん、前日山協会長の神崎忠男さん、HATJの坂上光恵さん、日山協指導委員長の蛭田伸一さんを招いて、「積雪期山岳地域における気象変化と事故防止対策」というテーマでのパネルディスカッションが行われた。

関東大会は8都県から男女各4校計61校（今回は神奈川・栃木に3校不参加校あり）参加して行われるという大規模な大会である。小生の話は、那須雪崩事故検証委員会の報告書に基づき、その概要を話させていただいた。雪崩事故が同じブロック内というきわめて身近なところで起こったこともあり、会場の先生方はもちろん、生徒の皆さんの真剣に聞いてくださる姿勢にこちらも身が引き締まる思いであった。

雪崩事故の概要、雪崩事故の原因、そこから何を我得て我々はどうしたらいいのか、そんな内容で話をさせていただくつもりで話を用意した。聞き取り調査の結果わかった事故当日の様子や、事故の原因は単にあの日のあの時にあったのではなくその前段階で、いくつものセーフティネットを抜けてしまったことにある。そんなことを話しているとあっという間に時間がたって、最後の提言の部分までいかないうちに時間切れになってしまったのは、残念だった。しかし、これは半ば織り込み済みで、3日目のパネルディスカッションの中で同じ検証委員の北村さんが補ってくださったので、参加者にはわかってもらえたと、先日千葉県の樽先生からうかがった。

さて、当日の私の話は、性質上いきおい内容は、高校山岳部顧問が何をしたらいいのかということを中心にした話になった。早しゃべりの上、そんな内容だったので、果たして高校生はどう受け止めてくれたのか、話し終えたあとちょっと心配だった。しかし、心配は無用だった。話を終えると、ひとりの女子生徒が挙手をしてとてもいい質問をしてくれた。曰く「この事故を受けて、私たちにできることはなんでしょうか？」と。真剣に受け止めてくれている生徒の最高の質問だった。

僕はこの質問に次のように答えた。「その一つは、この事故を風化させずに記憶し続けることが大事である。そしてもう一つは山岳部の生徒一人一人が登山者になるために勉強し続けること。」と言って、登山者とは何かという話をさせていただいた。「登山者とはなにかといえ、それは自ら登山を計画し、実践し、判断ができる人のことである。登山をする人には登山家と登山者と登山客がある。みんなが登山家になる必要はないし、なれるはずもない。しかし、人からあるいは先生から連れて行ってもらうだけの登山をしている人は登山客であって登山者ではない。みんなはぜひ登山者になってください。」と。「安全登山研修」に相応しいものになったうえに、この場において真剣に聞いてくださった生徒諸君はきっとこのことばをわかってくれたものと確信している。